

英国における才能教育の動向

—レディング・スクールの事例より—

杉 本 均

(1) 英国才能児への教育政策

才能児教育に対する潮流と特徴

英国における才能教育もしくは才能児に対する特別の教育については、伝統的に長い歴史があるということもできるし、近年始まったばかりであるともいえる。前者の才能教育とはもちろん、中世にまでさかのぼるパブリック・スクールを中心とした伝統校における、少数の上流階級の子弟を主として対象としてきたエリート主義的な教育であり、この伝統において英国の右に出る国は少ない。しかし少なくとも意図として階級的な再生産を目的としない、子どもたちの多様性に対応するための才能教育、国家的な教育水準の向上の牽引役となる才能児の育成、さらには恵まれない地域の子どもの潜在的能力の発掘という側面からの才能教育プロジェクトは、むしろきわめて近年の展開であるといえることができる^①。

後者の才能教育の出発点は意外にも1988年教育改革法以来のナショナル・カリキュラム (NC) とナショナル・テストの導入であるといえる。むしろこのカリキュラムとテストは児童・生徒の基礎的平均学力の底上げに導入の眼目があり、例外的で特異な才能への関心は低かったことは事実であるが、一方でこれまで多様かつばらばらであった才能概念を、競争的な環境のもとで良くも悪しくもひとつの評価基準のもとに比較・序列化して明示した点で才能教育政策への土壌を作ったといえる。英国におけるナショナル・カリキュラムは教育内容の画一化ではなく、教育水準の規格化であり、実際の教育実践はむしろ個々の児童・生徒の必要に応じて幅広く展開する可能性をひらいたものであった。フリーマン (1999) は、「NCは異なる能力の生徒には異なる課題が必要であることへの関心を高め、また生徒の知識、技能、理解度を評価し、記録し、報告するという手続きが、才能児の成績や進歩により鋭い焦点を与えることに貢献した^②」と述べている。

ホワイトラによれば、英国の公教育において才能児への配慮が1990年代中ごろまで不十分であった背景には、①才能児は常に成功するので、特別の援助は必要ない、②才能児は尊大で扱いにくい、③才能児はあまりに多様で対応できない、といった人々の思い込みがあったと分析している^③。子どもたちへの特別な教育的配慮 (special education needs: SEN) については第二次大戦後、「1944年教育法」「1981年教育法」そして「1993年教育法」においても繰り返し言及されているが、その主な対象は身体的なハンディを持つ子どもを想定しており、並外れた才能を持つ子どもはこのなかに含まれていなかった^④。

この流れに大きな変化の機運をもたらしたのは、教育水準監査院 (Office for Standards in Education: OFSTED) による報告を受けて政府が1997年に発行した教育白書「学校における卓越

性（Excellence in Schools）」であった。このなかで「特別な教育的配慮（SEN）」のなかに「都市部における才能教育（Excellence in Cities: EiC）」の実施がはじめて盛り込まれたのである⁽⁵⁾。1997年に誕生した労働党政権は不利な地域に住む子どもへの才能教育に対して特別の関心を示し、才能児を支援する国家政策の策定に焦点を当て始めた。才能児に関する政策のための専門家による諮問機関が設置され、EiCを推進すべき都市の教育的に不利な地区が指定された。これが「都市部における卓越性：才能教育索条（Excellence in Cities: Gifted and Talented Strand）」（以下「都市部における才能教育」と表記する）と呼ばれるプロジェクトである。一方、2000年前後からこうしたEiC指定地域以外の公立・公営学校の卓説性にも関心が及び、課外活動を中心にマスタークラス、サマースクールなどの取り組みが行われるようになった（後述）。またそれより一足早く、1994年から公営学校が民間からの後援金と政府からの補助金により、特定の専門職分野の教育に特別のプログラムを持つ学校カテゴリーに転換するスペシャリスト・スクール（specialist school）のプロジェクトが進行しており、2003年現在1,446校に達している⁽⁶⁾。こうして1997年から2000年の間に、才能児への教育問題は教育の周縁的な問題から中心的な問題となっていった。

「都市部における才能教育」とは1999年に開始された政府の政策で、指定された都市部の恵まれない地域の児童・生徒への教育と学習を支援し、拡張し、深化させるためのプロジェクトを立ち上げた学校に対して、補助金を支給するプログラムである。1999年9月からの第一期、2000年からの第二期、2001年からの第三期にわかれて59地区が指定されたが、その多くはロンドン、バーミンガム、リバプール、マンチェスターなどの大都市とその近郊であった。また一部の教育改善活動区（EAZ）がEiCに転換されて2003年で44の卓越性クラスター（Excellence Cluster）が生まれている⁽⁷⁾。これらの地区の指定校（Beacon Schools under EiC）は地域の学校群と連携して、「才能教育」についての教育プログラムを立案し、採用された場合には最高50,000ポンドの補助金が支給される。2003年現在でピーコン・スクールには266校が指定されている⁽⁸⁾。

教育技能省による2001年の教育白書『成功する学校（Schools achieving success）』には政府の才能教育についての基本政策が次のように記述されている⁽⁹⁾（3－15）。

- ☐ 国内のすべての学校、とりわけ不利な地域にある学校における才能児を支援する。
- ☐ 児童・生徒が自らの得意分野を伸長し、不得意分野を克服できるような、幅広いバランスのとれた教育を受けることを保障する。
- ☐ 学校での学習を学校外での補完的な経験と融合させる。
- ☐ 児童・生徒を年齢というよりも能力に合わせて発達させ、可能であれば全科目を浅くというより特定の科目を高度に習得させる。
- ☐ 児童・生徒の能力と必要に合わせて学習の速さ、深さ、広さをさまざまな割合で組み合わせる。教員は速習クラス、速習コース、国家試験への早期受験、早期合格を検討するように希望する。

より具体的には、2001年にはEiCへの参加校を1,000校にまで増やし、2005年までに少なくとも1,500校のスペシャリスト・スクール、400校の中等レベルのピーコン・スクール（指定校）、20ヶ所のシティー・アカデミー（City Academy）を設置することを宣言している⁽¹⁰⁾。

「都市部における才能教育」

「都市部における才能教育」の定義する才能はGifted とTalented の2種類に大別され、Gifted とはひとつもしくは複数の科目（美術・音楽・体育を除く）において高い達成の証拠を示したものを意味し、Talented は芸術やスポーツなどの創造的・表現的活動において高い能力を示したものであり、選抜の定義や方法、また選抜される生徒の比率についても両者において異なることが想定されていた。労働党政権下のEiCでは「すべての子どもの卓越性」（Excellence for All Children）に関心がおかれており、才能児の規模の定義も、「学校における同学年集団において、平均をはるかに超える高い達成を示した、あるいは達成する能力を持つもの」というもので、才能児のいない学校はないという前提から、才能児認定ガイドラインは才能児の比率を各年度の生徒集団の5%から10%と広く想定している。またGifted 集団のサイズはTalented のサイズの2倍以上となることを想定している。結果的に多くの学校は、才能児を10%以上、まれには30～40%までも含めて、才能児の定義を希釈したという⁽¹¹⁾。

才能児の識別には既存の評価テスト、ナショナル・カリキュラム評価データに加えて、標準テスト（知能テスト）による将来的な予測も加味された。また能力が潜在的に高い才能児の認定として、転校の多い子ども、生活保護家庭の子ども、問題行動児、識字能力・コミュニケーション能力にハンディのある子どものために、非言語論理能力テスト（non-verbal reasoning test）も使用された。もちろん教員による評価の比重は学校によって異なり、本人や家庭からの情報（コンテストや発表などの代表経験）などを加えた学校もあった。ガイドラインによれば才能児のグループは非固定的であり、中途合流もあれば離脱もありうると想定していた⁽¹²⁾。

具体的な提供カリキュラムについては、①「才能児」に対する特別な授業、学習プログラム、②すべての指定学校への才能教育コーディネーターの養成と配備、③学校外における学習支援機関プログラムなどが行われた⁽¹³⁾。才能教育の形態としてはいわゆる（a）エンリッチメント／エクステンション、（b）アクセラレーション、および（c）基礎的技能に分類される。

（a）エンリッチメント／エクステンション

EiCおよび教育技能省（DfES）が多くの場合用いる術語として、エンリッチメント（enrichment）とは既存の科目もしくは新しい科目からより広いトピックを学習すること、そしてエクステンション（extension）とは、既存の科目のトピックをより深く学習すること、とされている。前者の場合、主流カリキュラムにない新しい科目、心理学、考古学、追加言語など、を学ぶことによって学習のスコープを広げている。後者の場合、最も一般的なのは、博物館、ギャラリー、劇場などの学習訪問、ワークショップ、時間外クラブ、専門家による指導学習である⁽¹⁴⁾。EiCでは、最終的に学校カリキュラムの組織アプローチにまで変革を与えることが期待されているが、現時点では、クラス編成の変化などの兆しが見られる程度であるという⁽¹⁵⁾。

（b）アクセラレーション

アクセラレーション（acceleration）とは特定の科目において飛びぬけた成績を収めた生徒が、1年年上の学年に移動してその科目を学習する形態であるが、それが果たして才能児にとって有益であるのか、あるいはかえって害があるのかについて、才能教育のなかでも最も議論の分かれる問題でもある。英国ではアメリカに比べて、才能ある児童・生徒が学校の全時間同級生から隔離されたり、促進プログラムに入れられたりする度合いは少ないといわれ、そのかわりに児童・生徒は特定の科目において促進プログラムに入れられることが多いという⁽¹⁶⁾。また、アクセラレ

ーションの一形態としてGCSE試験を早期受験する形態もあるが、近年早期受験の比率は1998年の0.63%から2000年の1.13%へと増加している⁽¹⁷⁾。

(c) 基礎的技能

EiCの多くの学校は基礎的技能の時間数の増加も導入していた。これは潜在的には学術的科目の才能があるのに、基礎的技能が相対的に弱いので、コースを十分に活用できない児童・生徒のためのもので、内容・形態は自習能力、自己信頼と責任感の向上、ICTアクセス能力の向上などが才能教育の効果を高めるには必要であると考えられている⁽¹⁸⁾。

「都市部における卓越性」以外の才能教育

英国では近年、「都市部における卓越性」政策に指定された地域以外でも、政府による才能教育・開発プログラムに資金供与が行われるようになった。マスタークラス（masterclasses）は、小学校と中等学校において、特定の科目について才能を持つ、もしくは潜在的な才能を持つと判断された子どもを集めて、深い理解と高い技能を獲得させるために開催される集中コースであり、1998年から実施されている⁽¹⁹⁾。サマースクール（summer schools）は第6～9学年の優秀な生徒を、各学区についてひとつの学校に集め、夏休みの1～2週間、特定のトピックやテーマに基づいて学習、調査、訪問を行い、専門家の指導を受けて発展的な研究を行うプロジェクトである。1999年から指定地域で開始され、2000年には全国のLEAに拡大された⁽²⁰⁾。

独立／公立学校パートナーシップ（independent/state school partnership）は1998年より開始された数校の独立学校と公立学校群の間で、芸術、ICT、スポーツ、才能教育などに関する交流授業を行うプロジェクトである。単独の学校では通常得られない講師、クラスメイト、施設や環境のもとで特定の科目を学習することができる。開始から6年間で220のパートナーシップに800校、およそ8万人の児童・生徒が参加した⁽²¹⁾。ワールド・クラス・テスト（World Class Test）はWorld Class Arenaが主宰する国際テストで、9歳から13歳までの才能ある児童・生徒を対象としている。数学および問題解決型の創造的思考と論理能力に関する試験であり、世界中の児童・生徒が参加可能である⁽²²⁾。これらの才能教育プロジェクトには独立学校や都市部の指定校以外の公立・公営学校も様々な形で関わり、参加している。そのなかには学校全体において才能教育を標榜し、推進している選抜性の高い公営学校も存在している。以下では、そのひとつの事例としてレディング市にあるグラマースクール、レディング・スクールについての訪問調査の結果を報告する。

(2) レディング・スクールにおける才能教育

レディング・スクール

レディング・スクールは、レディング修道院（Reading Abbey）が創立された1125年に学校としての教育も開始されたという記録により、イングランドにおいて10番目に古い学校とされている。ヘンリー7世の時代の1468年にフリー・グラマースクールとなって王室の庇護を受け、エリザベス1世の治世1560年にレディング・バラ（自治体）の管轄下に入った。1991年に維持学校（grant-maintained）となり、1999年からは財団立学校（foundation school）となった。第7学年

(11歳), 第9学年(13歳), 12学年(Form 6 16歳)に3時点で生徒を受け入れているが, 11歳時点の入学定員は112名で, のちの編入により16歳時点で200名前後の学年規模となる。政府立の学校なので授業料は11歳から17歳までの全課程で無償で, 他に寮費・食費などのみが自己負担となっている。カウンシルや地方教育当局と緊密な連携関係にはあるが, 入学者の選考やカリキュラムの策定などには完全な自律性をもっており, 学校の基本政策は理事会(governing body)が決定している。寮の部屋は112室と限られており, 全生徒の約1割程度のみが入寮可能なので, ほとんどの生徒はレディング地域から通学している。寮費は第11学年まで年間2,300ポンド, 12学年からは年間2,450ポンドである⁽²³⁾。

レディング市はロンドンの西50km, 列車で30分くらいの距離に位置する, 人口20万人程度の閑静な都市である。学校が現在のアーレイ街(Erleigh Road)に移転されたのは1871年であるから, 地域の中核大学として隣接するレディング大学(University of Reading)がオックスフォード大学から分離独立した1892年より古いことになる。メインビルディングおよびチャペルはビクトリア期の有名な建築家ウォーターハウス(Alfred Waterhouse)の設計になる重厚な塔建築である。1888年に結成されたOld Redingensian's Association と呼ばれる卒業生の組織(同窓会)があり, 現在でも1000人の会員によって維持されている。1986年にはレディング基金(Reading Foundation)が設けられ, 学校と生徒の福利・発展のために援助や表彰を行っている。学校は地域において伝統と実績において有名であり, 多くの親が子どもを入学させたいと希望している。男子のみの学校であるが, 近隣に同じく名門女子校のケンドリック・スクール(Kendrick School)があるので, 好対称をなしている⁽²⁴⁾。

レディング・スクールにおける才能教育

(A) 才能児の定義

レディング市は政府の才能児教育促進のための対象地域の指定からもれているために, レディング・スクールはEiCの資金からは援助を受けることはできない。しかし学校は政府の近年の政策開始以前から, グラマースクールとしてエリート主義ではない才能児教育をその基本方針として実施してきた。Gifted およびTalentedの区別は政府の定義と同じく, Gifted とは認知的才能(academic), Talented は芸術的才能を意味している。しかしその比率については政府はすべての学校に5~10%の才能児の存在を想定しているが, レディング・スクールの場合はその厳しい選抜性により, ほとんどすべての在校生徒が才能児のカテゴリーに属すると考えられる。したがって学校はすべての生徒を才能児として扱い, 「すべての生徒の卓越性」を引き出すという観点から, 隔離された才能児のクラスを設けるようなことはしていない。ただし各学科ごとに独自の評価を行い, 科目ごとに上位5%の成績の者を科目別に最優秀児としてノミネートし, 全国レベルの才能教育発展活動に参加するように推薦している。また科目別の到達度別のクラス編成をしたり, 困難を感じた生徒たちを少人数で指導するということもあり得る⁽²⁵⁾。

(B) 才能教育の形態

レディング・スクールの才能教育の形態は(1)エンリッチメント(enrichment: 科目選択の幅), (2)エクステンション(extension: 同一科目内の深化), (3)アクセラレーション(acceleration: 速習)の3形態において実施されている。ここでいう(1)エンリッチメントとは, 通常の才能教育でい

う特定の科目内容を深化発展させた学習というよりは、科目選択の幅の大きさや、ナショナル・カリキュラムや国家試験に含まれない科目などの提供を意味している。例えば9～10学年では理科ではなく、化学・物理・生物などの個別科学科目を持ち、GCSEの試験科目は通常8～9科目であるのに対し、ラテン語、ギリシア語、ドラマ、ビジネスなど12～13科目を学んでいる。また第11年生の半数以上の生徒が発展数学の科目を取り、このレベルですべての生徒が12科目を履修するのが普通である。2番目の(2)エクステンションは、ここでは深化 (depth) と説明されていることから、通常のエンリッチメントの意味に近い、同じ科目や単元をより深く高度に学習する発展学習を意味している。すべての学科でより上級の教科書や教材を用いて、生徒の高い関心や興味に込めている。また図書館や共通カリキュラムの活動はこのエクステンションの活動に貢献している。最後の(3)アクセラレーションは、通常は優秀な生徒が学年を飛び級したり、早期卒業したりすることを指すが、レディング・スクールの場合は学年を超えた飛び級や早期卒業は行っていない。かつて数学科で行ったことがあるが、成果は期待したものではなく、生徒の社会的交流を阻害したという弊害が指摘されている。したがってすべての学科では上記のエクステンションという形態で、上級学年の教科書や教材を下の学年に引き下げて使用する形の速習 (アクセラレーション) を取り入れている⁽²⁶⁾。

(C) 才能児の識別・選抜

才能児の識別・選抜に関しては、全校生徒を才能児として扱う方針により、入学試験が事実上の才能児選抜試験ということになる。したがって学校が新入生を受け入れる第7学年 (11歳)、第9学年 (13歳)、12学年 (Form 6 16歳) に3時点で選抜が行われる。第7学年の入学では、①学校の行う入学試験、②キー・ステージ2の成績、③各学科 (科目) の評価、④識字・識算能力、⑤個別のケースの専門的判断によって行われている。入学定員は1年で約100人であるが、志願者は毎年およそ500人にのぼり選抜競争率は5倍の狭き門である。入学試験には①数学、②言語能力試験 (verbal reasoning test)、③非言語能力試験 (non-verbal reasoning test)、④英語の4科目を課しており、問題の作成には多くの労力を投入している。第9学年と第12学年の場合は、GCSE試験やGCE-Aレベル試験などの国家試験の成績、その他の政府による任意受験の試験、学校における定期試験の結果、課外活動や寮での諸活動の実績、本人と教師や保護者との面談、日常の観察などの総合評価によっている。多文化社会において生徒の才能が言語的障害により十分に発揮されていない可能性に考慮して、非言語的な能力試験も採用しており、レディング・スクールは入学選抜の厳しい学校としては例外的に英語を母語としない生徒の比率が高く、約3分の1を占めている。そしてこれらの生徒の優秀性を十分に発揮させることが、多文化社会英国の学校としての課題であるととらえている。表2のその他の民族には日本人も含まれている⁽²⁷⁾。

表1 レディング・スクールの生徒数 (2001)

	第7-11 学年	6 フォルム
生徒数	592	249
就学援助の必要なもの	1	0
特別な教育措置登録者	9	7

出典：OFSTED, Reading School Inspection Report (189360), 2001, p.22,
(<http://www.ofsted.gov.uk/reports/110/110097.pdf>)

表2 レディング・スクールの生徒の民族構成(人(%)) (出典:同上, p.26)

黒人(カリブ系・アフリカ系他)	9 (1.1%)
インド系	45 (5.4%)
パキスタン・バングラデシュ系	16 (1.9%)
中国系	20 (2.4%)
白人	726 (86.3%)
その他	25 (3.0%)
合 計	841(100%)

(D) 才能教育カリキュラム

レディング・スクールの才能教育カリキュラムそのものは、学校がステート・スクールなのでナショナル・カリキュラムに完全に従っているが、上述のようにすべての科目で、すべての生徒に対して深さと広さと速さという点で、通常のNCとは異なる選択が可能である。また知的能力と創造性、動機などとの関係にも配慮を加えている。キー・ステージ3でのコア・カリキュラムは芸術、化学、ドラマ、英語、フランス語、地理、ドイツ語、歴史、ラテン語、数学、音楽、物理、宗教、スポーツ、技術の15科目で、一時限35分を1週間に40時限提供している。キー・ステージ4の場合は週45時限になるが、コア・カリキュラムとして、生物、キャリア教育、化学、英語、英文学、フランス語、数学、スポーツ、体育・保健、物理、宗教教育、技術の12科目に加えて、選択科目として、芸術、ビジネス(商業)、経済、古典文明、ドラマ、地理、ドイツ語、ギリシア語、歴史、ラテン語、音楽、ITの12科目がある。第12学年(フォルム6)では生徒は最低4つ、多くは5つか6つのAレベル試験を受験する。このレベルではさらに多くの新しい科目が提供され、芸術、生物、古典文明、化学、経済、英語、英文学、フランス語、地理、ドイツ語、政府および政策、ラテン語、数学および上級数学、音楽、物理、体育、デザイン・技術、劇研究などから選ぶことができる。芸術、音楽、デザイン・技術、劇研究などの科目は芸術的才能児(talented)に提供されている。レディング・スクールは各学科において主任を置き、それぞれが才能教育についての取り組みを行っている。各学科(抜粋)ごとの教育方針は以下の表3のとおりである⁽²⁸⁾。

ICT(情報・コミュニケーション技術)はすべての科目や活動において活用されている。そのほか学校にはさまざまな課外活動の機会があり、個人の才能や必要に応じた学習や活動が可能である。学校の課外活動には競技的なものから娯楽的なものまでいろいろなカツ小津があり、スポーツチームや同クラブ、音楽サークル、オーケストラ、ジャズクラブ、ドラマクラブがある。すべての教員は無給で少なくともひとつのクラブ活動を管理することが求められており、数学の教員はかなり高度なレベルのチェスとブリッジのクラブを指導している。学校の活動は寮(House)のシステムに基づいて行われ、多くのスポーツ、音楽、ドラマが寮対抗の形式で争われる。観劇、教育施設訪問や招待講演会などは日常的に行われている⁽²⁹⁾。

(E) サマースクール

レディング・スクールは政府主催の才能児サマースクールを2000年度より各年3コースずつ開

表3 各教科(学科)別の才能教育方針(抜粋)

英 語	全生徒へのコア・カリキュラムを越えた教育。高いレベルの思考および論述技能を発達させる。第7～8学年：クイズ、作詩コンテスト、佳作展示、観劇活動、第9学年：交流校訪問、フォルム6：ロールモデル、上級～下級生メンタリング、ゲスト講演会
数 学	全学年の全生徒へのコア・カリキュラムを越えた教育。中級・上級数学チャレンジ、第12学年：数学競技大会、パズル、クイズ大会、展示。第9学年パークシャー・マスタークラス、大学マスタークラス、第6～7学年サマースクールなどを実施する
生 物	プロジェクトやシラバスは生徒の創造性や発展的思考技能を奨励する。第13学年：5人が参加する生物学オリンピックへの参加、病院訪問、招待講演会、医学生・獣医生希望者へのガイダンス提供
化 学	全生徒へのコア・カリキュラムを越えた教育。第8～11学年：王立化学協会化学賞(RSCTop of the Bench)、王立化学協会 化学オリンピック(RSC Olympiad)へのエントリー(限定人数)
物 理	全学年、全生徒へのコア・カリキュラムを越えた教材の提供。キー・ステージ3 & 4での全国水準以上の教育。物理発展研究賞(AEA award)。素粒子物理学マスタークラス、紙バサミ物理(物理実験コンテスト)、機械工学研究所(ImechE)講義
歴 史	発展的思考技能の発達。オープンエンド研究の奨励、GCESレベル生徒へのAレベル教材の使用、フォルム6：歴史学会員による講義

出典:Reading School Gifted and Talented Policy and Provision from January 2004, 2004,unpublished document, pp.3-4.

表4 2004年 レディング・スクール才能児サマースクールプログラム(案)

日時	2004年7月22日～30日
トピック	「健康・富そして幸福」
カリキュラム	・ 国家の経済的成長を教育、住宅、雇用および社会問題などを含めた健康問題とリンクさせて、健康と富の関係について探求する。また低開発国の債務やエイズ、水の供給などとの関連を考察する。 ・ 「富は人を幸福にする」などの主張について議論する。 ・ 富と幸福の関係に関する生徒による統計的調査 ・ 社会経済システム、金融政策、金利と個人的財産の探求
目的	以下の作業によって識字・計算・思考技能を向上させる ・ 統 計 仮説の設定、調査の設計、代表サンプルの抽出、データ分析、データに基づく立論、相関関係の検証、立論の限界の認識、図表や関連説明文などを用いた統計の有意義な活用、 ・ 低開発諸国の問題についての理解 ・ ディベートへの参加 ・ 問題解決およびチームワーク ・ 上記課題を効率的に行うための学習ツールとしてのITの使用
担当者	3名 指導員、補佐教員、事務スタッフ
訪問予定	ロンドン科学博物館、イングランド銀行

出典: Reading Borough Council, 2004, *Proposal for Gifted and Talented Summer Schools*, unpublished handout sheet.

催校として受入れてきた。サマースクールとは小学校で優秀な成績をおさめた全バラ (borough) の10歳から12歳の生徒に対して、夏休みに特定のテーマに基づいて2週間の集中コースを提供するものである。これは英国政府の才能児教育の国家戦略の一つであるが、学校はこのプロジェクトについて資金を提供され、その企画・運営についての一切を任されている。

このサマースクールでは、毎年「飛行」「生命の多様性」「宇宙」などの刺激的なトピックが選ばれ、参加者はプラネタリウムや科学博物館などの教育施設への訪問などによって具体的かつ発展的な知識を吸収し、広い範囲の数学、科学、デザインの知識や技能を用いながら議論とレポートを行う。このプロジェクトにおいて生徒はさまざまな学習経験を通じて、大きな刺激を受け、自信を獲得していることが示されている。このコースへの参加は無料であり、9月からのレディング・スクールへの入学を想定している生徒にはとりわけ有益であると考えられている⁽³⁰⁾。以下は2004年度のサマースクールのプログラム案である。

(F) 大学との提携

英国に限らず、才能教育の実施には特殊かつ高度な学習内容が要求されるので、様々な教育機関、社会施設、政府機関との連携が必要であり、また英国政府も協力体制の構築を積極的に支援している。とりわけ中等教育段階の才能教育は高等教育の施設、資源、スタッフとの接触、利用、協力がきわめて重要な要素となる。レディング・スクールの多くの学科でも、学外機関とりわけ

表5 レディング・スクールと大学との連携（レディング大学など）

学 科 (抜粋)	連携大学：内容
英 語	レディング大学：英文学講義への出席（フォルム6） オックスフォード大学（Brasenose College）：泊り込み訪問 UCロンドン：ゲスト講演・訪問討論
数 学	N/A
物 理	レディング大学：物理学科とのリンク（液体窒素低温実験）、工学部とのリンク
化 学	N/A
生 物	レディング大学：リンク無し（大学講義への出席許可を希望）
地 理	レディング大学：土壌学科と緊密なリンク（インタビュー、個人指導） オックスブリッジ、LSE、バース大学：グループ訪問
歴 史	レディング大学：歴史学科と強いリンク、聴講（フォルム6）歴史学会の地域支部の訪問
古 典	レディング大学：聴講、古典読解コンテスト参加、大学博物館での労働体験訪問（フォルム6）、大学GTRコース ケンブリッジ大学：教員免許コース古典講師とのリンク
現代外国語	レディング大学：大学のフランス人・ドイツ人学生が週単位で来校（第8～10学年）、大学による近代言語劇公演 ベルサイユ大学：フランス語助手を派遣

出典: Reading School Gifted and Talented Policy and Provision from January 2004, 2004, unpublished document, p.6.

大学との連携は積極的に行われており、隣接するレディング大学をはじめとして、国内外の様々な大学との連携、訪問・授業出席、講師招聘、個人的交流を行い、才能教育の質の向上に努めている。以下の表5はその各学科ごとの提携状況の一覧である⁽³¹⁾。

(G) 実績

レディング・スクールの生徒の成績は、GCSE 試験やAレベル試験などの国家試験の結果において、例年きわめて優秀な成績をおさめている。たとえば2003年度のGCSE試験の結果では、数学を受験した120人のうちA*が79人、Aが39人、Bが2人でC以下はなしという、驚異的な成績を残している。(表6) フォーム6の生徒が受験するAレベル試験でもB以上の成績を残したものの比率は、各科目で全国平均をおよそ30ポイント上回っている。(表7) 他の科目も総じて優秀であるが、とりわけ数学に関しては全国でも最高の評判を維持している。各学科ごとの独自の評価に基づいて、上位5%の生徒を最優秀生徒として登録しており、この生徒を中心に希望者をワーウィック大学の全国才能児アカデミー (National Academy for Gifted and Talented Youth: NAGTY) のプロジェクトにノミネートしている。2003年度には37人の生徒がこのプロジェクトに参加している。

全国国家試験の結果はいわゆるリーグテーブルとして教育技能省よりランキング化されているが、上田 (2003) によればその上位はほとんどがいわゆる名門独立校が占める中、過去3年間

表6 レディング・スクール2003年度GCSE成績分布

科目	A*	A	B	C	D	E	U	受験者数	A以上%	C以上%
英語	58	54	8	—	—	—	—	120	93	100
英文学	33	55	26	6	—	—	—	120	73	100
歴史	25	18	7	2	—	—	—	52	83	100
地理	9	22	25	8	—	—	—	64	48	100
ドラマ	15	8	5	3	—	—	—	120	82	100
数学	79	39	2	—	—	—	—	120	98	100
物理	56	28	27	8	1	—	—	120	70	99.2
化学	62	38	16	4	—	—	—	120	83	100
生物	57	43	17	3	—	—	—	120	83	100
技術	16	22	11	3	1	1	1	55	69	94.5
美術	2	8	8	10	—	—	—	28	36	100
音楽	6	2	1	—	—	—	—	9	89	100
宗教	11	55	42	11	—	—	—	120	55	99.2
全科目計	403	508	240	68	5	1	1	316	76.1	99.5

出典: Reading School: A Selected Foundation School for Boys, 2004, Examination Results.

表7 GCE Aレベル試験における各科目の成績

科目 (抜粋)	受験者数 (人)	B評価以上の者の率		平均スコア	
		本 校	全 国	本 校	全 国
数 学	87	76	45	8.3	6.0
英文学	23	70	36	8.3	5.9
物 理	26	73	41	8.1	5.7
生 物	43	49	34	6.7	5.3
歴 史	19	53	34	6.6	5.4
経 済	19	84	36	8.8	5.4
美術・デザイン	4	100	45	8.0	6.4
音 楽	5	100	35	9.2	5.7

出典: OFSTED, Reading School Inspection Report (189360), 2001, p.38,
<http://www.ofsted.gov.uk/reports/110/110097.pdf>

表 8 2003年度GCSE成績 グラマースクール全国上位11校

学 校 名	地 域	生徒数	平均スコア
1 Reading School	Reading	120	80.8
2 King Edward VI Camphill Sch for Girls	Birmingham	122	79.1
3 King Edward VI Camphill Sch	Birmingham	95	77.0
4 Newstead Wood Sch for Girls	Kent	134	76.7
5 Tongbridge Grammar Sch for Girls	Kent	148	76.1
6 King Edward VI Aston Sch	Birmingham	100	75.4
7 St Michaels Catholic Sch	Barnet	94	74.4
8 The Henrietta Barnett Sch	Barnet	92	74.3
9 Pates Grammar	Gloucester	122	73.9
10 King Edward VI Grammar Sch	Essex	110	73.9
11 Kendrick Sch	Reading	92	73.6

出典: *The Independent*, 22 August 2003; 'sch'=school.

の平均で公立学校のレディング・スクールは第9位にランクされている⁽³²⁾。2003年度のGCSE成績全科目平均でのランキングではレディング・スクールはグラマー・スクールのなかのトップ校として報道されている。(表8)

レディング・スクールは2001年11月に教育水準監査院 (OFSTED) の評価を受けており, その報告書が公表されている。それによれば優れた点として, ①学校のサービス水準はきわめて高く, 試験における成績は全国の学校の上位5%以内に位置している。②教育は生徒の高い達成に完全にマッチしており, その結果第7~11学年の生徒の成績は特に優れている。③生徒の学習への態度は卓越している。④学校はすべての生徒に対して例外的に広く深い内容の教育を提供している。⑤各学科主任の卓越した指導性と管理能力により, すでに高い水準がさらに全国平均より高いレベルで改善されている。

一方で改善の可能な点として, ①第7~9学年の生徒はデザインと技術において十分に多様な教育を受けていない。②フォーム6レベルの教育も十分に優れているが, 第7~11学年で行われている教育の卓越性には及ばない点があげられていた⁽³³⁾。通常のOFSTED評価報告のなかでは最高レベルの評価であることは疑いないが, 卓越の定義と評価基準が学力試験の成績に大きく偏っており, レディング・スクールの様々な課外活動や社会貢献, 生徒の気質や行動などの側面が, 学科試験と対等の比重をもって評価されているとはいえない点。英国の才能教育を含めた学校評価に共通する点である。

表 9 OFSTEDによるReading Schoolの水準総合評価

	全学校種中			同類校中
	1999	2000	2001	2001
GCSE 試験	A*	A*	A*	A*
A/AS レベル	A*	A*	n/a	—

出典: OFSTED, Reading School Inspecti Report (189360), 2001, p.8, <http://www.ofsted.gov.uk/reports/110/110097.pdf>

A* very high
A well above average
B above average
C average
D below average
E well below average

(H) 教員

レディング・スクールでの才能教育はG&Tコーディネーター、各学科主任、各教員というレベルで全スタッフによって担われている。G&TコーディネーターのMrs. McDonaldはワーウィック大学の全国才能児アカデミーの会員であり、各教科の主任に対して、独自のプログラムの開発・改善を行う際のコーディネートと事後評価を行う。才能教育各学科のすべての教員は高い資格と科目に関する高度な知識、およびそれを支援するのに必要なICTの技能を有している。才能教育訓練は国家レベルと地域レベルで、EiC才能教育プログラムの一部としてすべての教員に提供されている。これは国家レベルで指導員を養成し、その指導員が各地域で地域指導員を訓練するというカスケード方式が用いられているが、この手法は時間がかかりすぎ、末端では十分な技能の習得ができないと考える教員が増えている⁽³⁴⁾。

教員のリクルートについては数学の教師に関しては学校の評判が高いので、通常の公募で問題はないが、英語教師は教員の社会的地位が日本のように高くないので他の職業や教育機関への転職者が多いことが問題として指摘されていた⁽³⁵⁾。

(3) 結 語

英国の才能教育は以上見てきたように、民間の慈善団体、伝統的な私立名門校、公立・公営学校、都市部の恵まれない地域の学校などにおいて、大学、文化教育施設、政府施設などとの協力のもとに様々な形態において実践されている。政府のイニシアティブとしては、ナショナル・カリキュラムの導入以来、学力の向上と水準の規格化への関心が高まり、「すべての子どもの卓越性」を目指すという観点から、恵まれない地域の学校の子どもを中心に、同学年集団の5～10%という比較的大きなサイズの才能児集団の存在を想定している。才能の定義としてはGiftedを認知的科目における高い達成、Talentedを芸術的・創造的分野における高い能力という2つの領域に二分して多様な才能概念に対処しているが、その才能の発掘や評価の基準において国家試験の成績の存在が比較的大きい点が特徴的であると言える。GCSEやAレベル試験にもドラマや美術、音楽という科目があり、この分野においても点数化された試験成績がリーグテーブルに公表されるため、Talentedに属する分野の才能も、かなり国家試験によって定義されるという傾向がある。

才能教育の形態としては、エンリッチメントを通常のカリキュラムにはない広いスコープの学習、エクステンションを既存の科目における発展的な深い学習と定義して、両者を取り入れることを奨励していた。もうひとつの形態であるアクセラレーションに関しては、才能児を学年を超えて進級させる飛び級や国家試験の早期受験・卒業についてはあまり積極的ではなく、数学などの特定の科目について、能力別クラス編成を行ったり、上級で使用される教科書や教材を下級のクラスで使用するといった速習教育に限定されて導入されていた。

ケーススタディとして報告したグラマースクールの才能教育実践校であるレディング・スクールは、授業料無償の公営学校において、私立名門校にひけをとらない全国でも有数の国家試験の成績を残している学校として示唆するものが多い。国内でいくらすばらしい才能教育が行われているようにも、そうした学校がすべて高い授業料を徴収する私立校であったり、独特の文化的エー

トスに支配される名門校だけに独占されていたならば、その国の才能発掘の対象となる母集団からかなりの人口やカテゴリーが最初から排除されてしまうことを意味してしまう。そうは言ってもレディング・スクールの生徒の出身家庭の社会的・経済的地位がかなり高いことは否定できないが、中等教育7年間の授業料を気にせず子どもたちに才能の探索期間を与えられる施設が、レディング・スクールに限らずイングランド・ウェールズに34校あるということは、学校選択の観点からも重要な意義を持っていると言える⁽⁶⁶⁾。通常の公立中等学校の給与スケールで、こうした教員の高い士気を保持し、優秀な教員をリクルートできる環境と体制の分析が必要であろう。

また効果ある才能教育はその学校単独ではほとんど不可能であるという現実に鑑みて、才能教育実践校をめぐる地域や近隣大学との協力や連携、才能教育校どうしのパートナーシップ・プロジェクトなども興味深い。日本の場合、大学側が実施する入学試験の競争性の高さとその中立性が大きな意味を持っているので、特定の高校との高大連携には、大学入試の公平性や中立性の保持という観点から障害が大きい。

【註】

- (1) 麻生誠, 岩永雅也編, 1997年, 『創造的才能教育』155頁, 玉川大学出版部。
- (2) Joan Freeman, 1999, *Educating the Very Able: Current International Research*, p.53, OFSTED Review of Research, University of Middlesex.
- (3) Kerensa White, Felicity Fletcher-Campbell and Kate Ridley, (National Foundation for Educational Research), 2003, *What works for gifted and talented pupils: a review of recent research*, p.5, LGA educational research programme.
- (4) 梶間みどり, 2003年, 「イギリスにおける『才能児教育』プログラム開発」92頁, 小松郁夫編, 『知識社会におけるリーダー養成に関する国際比較研究』(国立教育政策研究所, 平成13～14年度政策研究機能高度化推進経費, 研究成果報告書(最終報告))所収。
- (5) Excellence in Cities: Project Overview:
<http://www.standards.dfes.gov.uk/sie/eic/EiCOverview/>
- (6) http://www.standards.dfes.gov.uk/specialistschools/what_are/?version=1 スペシャリスト・スクールについては, 佐々木毅, 2001年, 『イギリスにおける中等教育再編に関する研究—スペシャリスト・スクールを中心に—(中間報告書)』(平成12年度科学研究費補助金, 基盤研究(C)11610303)に詳しい。
- (7) EiCの指定地域の分布地図<http://www.standards.dfes.gov.uk/sie/images/EiCMap.jpg>
- (8) <http://www.standards.dfes.gov.uk/beaconschools/>
- (9) Department for Education and Skills, 2001, *Schools achieving success*, (Chapter 3, Achieving high standard for all- supporting teaching and learning, (3-15)), p.21.
<http://www.dfes.gov.uk/achievementsuccess/images/schoolsachievingwhitepaper.pdf>
- (10) *Ibid.*, p.37, p.39.
- (11) OFSTED, December 2001, *Providing for gifted and talented pupils: An evaluation of Excellence in Cities and other grant-funded programmes*, pp.11-12, A Report from Her Majesty's Chief Inspector of Schools.
- (12) *Ibid.*, pp.13-14.
- (13) 梶間, 2003年, 前掲書, 96頁。
- (14) OFSTED, 2001, *op. cit.*, p.19; 例として第8年生における「環境の持続可能性」に関する1週間泊り込みコース, 音楽やドラマのマスタークラス, キー・ステージ3の才能児を対象とした「思考クラブ」, 言語専門家の指導による時間外言語学習などがあげられていた。
- (15) *Ibid.*, p.20.
- (16) Kerensa White, Felicity Fletcher-Campbell and Kate Ridley, 2003, *op. cit.*, p.5.

- (17) OFSTED, 2001, *op. cit.*, p.19.
- (18) *Ibid.*, p.20.
- (19) *Ibid.*, pp.15-16.
- (20) *Ibid.*, p.16.
- (21) *Ibid.*, pp.16-17; <http://www.dfes.gov.uk/buildingbridges/history.shtml>
- (22) Kerensa White, Felicity Fletcher-Campbell and Kate Ridley, 2003, *op. cit.*, p.15;
<http://www.worldclassarena.org.uk/v5/default.htm>
- (23) Reading School, undated, A Selective Foundation: School for Boys, Day and Boarding, Historical Background, Brochure; Reading School Home Page;
<http://www.readingschool.reading.sch.uk/index.htm>
- (24) *Ibid.*; (Reading School Home Page).
- (25) McDonald, Margaret, 2003, 'The Gifted and Talented: A Teacher's Perspective', pp.4-5, in 小松郁夫編, 前掲書所収。
- (26) *Ibid.*, pp.5-6.
- (27) *Ibid.*, pp.4-5.
- (28) Reading School Gifted and Talented Policy and Provision from January 2004, 2004, unpublished document, pp.3-4.
- (29) McDonald, 2003, *op. cit.*, pp.5-6.
- (30) *Ibid.*, p.15.
- (31) Reading School Gifted and Talented Policy and Provision from January 2004, 2004, *op. cit.*, p.6.
- (32) 上田学, 2003年, 「英国におけるエリート教育の一断面」, 小松郁夫編, 前掲書所収, 86頁。
- (33) OFSTED, *Reading School Inspection Report* (189360), 2001, p.7,
<http://www.ofsted.gov.uk/reports/110/110097.pdf>
- (34) McDonald, 2003, *op. cit.*, p.16.
- (35) 2004年7月15日 Mrs. MA McDonald (英語科主任)へのインタビューによる。
- (36) Department of Education and Skills, Guide to Maintained Boarding Schools, brochure.

【英国才能教育関連サイト】

- 1. National Academy for Gifted and Talented Youth(NAGTY)
<http://www.warwick.ac.uk/gifted/index.htm>
- 2. National Association for Gifted Children (NAGC)
<http://www.nagcbrtain.org.uk/>
- 3. National Association for Able Children in Education (NACE)
<http://www.nace.co.uk/home.htm?aims.htm~mainFrame>

本研究には日本学術振興会科学研究費補助金, 平成15～16年度基盤研究(C)(2)「児童・生徒の潜在的な能力開発とカリキュラム分化に関する国際比較研究」の助成を受けた。

(比較教育政策学講座 助教授)

(受稿2004年9月9日, 受理2004年11月30日)

Trends of Education for Gifted and Talented in England and Wales: A Case Study of Reading School

SUGIMOTO Hitoshi

Since it came to power in 1997, the British labour government has tried to establish a national policy to assist gifted and talented children especially in the areas of disadvantage. Recently major developments were made in implementing the G&T strand under the project of 'Excellence in Cities' initiative. Through programs like Master-classes or Summer Schools, state maintained schools have also been involved in various types of G&T activities. This paper then discusses the recent trends of G&T education in the public sector. Reading School, in a case study, is a selective grammar school for boys offering G&T education for all the pupils. Achievements of pupils in the national test are exceptionally high and the school was placed in the top five per cent of schools nationally. The curriculum of the school has a grater range of subjects and allows for a deeper exploration of students in the enrichment program. These selective grammar schools, like Reading School, play an important role in offering choices for parents in the national structure of education for G&T providing the highest quality of education without charging any tuition fees.